

大坂町奉行所における与力・同心体制の確立

渡 邊 忠 司

〔抄 録〕

大坂町奉行は元和五年（一六一九）に配置され、大坂市中と畿内・西国を統括する徳川政権の遠国奉行の一つである。実務は、治安・警察、訴訟・裁判および触書の発令など民事・刑事全般に及んでいた。東町・西町両奉行のもと、それぞれ与力・同心三〇騎・五〇人が配属され、大坂町奉行の支配所と支配国統括の実務を担っていた。

一般的に、大坂町奉行所与力・同心は大坂地付・土着の侍・武士、世襲的相続の役職と見られているが、元和五年当初からそうであったわけではない。三〇騎・五〇人の定数の固定は現在のところ慶安元年（一六四八）以降のこととみてよいが、それまでは

西町奉行の不在時期もあり、不足であった。また、役職も世襲ではなかった。しかし、これらの経過については、これまで十分な検証が行われたとはいえない。

本稿は、その与力・同心の定数の確定と、地付侍化・土着化、また役職の世襲的相続などについて、大坂町奉行所の実務態勢の確立と関連させて検証したものである。

キーワード 大坂町奉行、与力・同心、地方知行、

地付・土着化、世襲的相続

はじめに

安政二年（一八五五）五月、大坂西町奉行として赴任した久須美佐渡守祐雋は、ある種の感慨を込めて、大坂地付（土着）の与力・同心

を町人の風情に影響されて武士の気概をなくし、「廉恥の心薄く、質朴の風なし」と評した¹。与力・同心は大坂地付の武士の典型とみられているが、もちろん大坂町奉行所だけでなく、定番ほか大坂城守衛役職や大坂船手奉行などにも配属されていた（表1）。

表1 奉行と与力・同心

遠国奉行	定員	配下			備考
		与力	同心	他の配下	
伏見奉行	1	10	50		
長崎奉行	1	10	15	長崎奉行並・吟味役・調役・下役	定員4の時期もあり
京都町奉行	2	40	100		
西町	1	20	50		
東町	1	20	50		
大坂町奉行	2	60	100		
西町	1	30	50		
東町	1	30	50		
日光奉行	3		36	組頭2 支配吟味役6	
山田奉行	1	10	75		定員2の時期もあり
奈良奉行	1	7	30	牢番1	定員2の時期もあり
堺奉行	1	10	50		
浦賀奉行	1	10	50	組頭1 足輕20 水主頭取11 足留水主190 水主50	下田奉行 定員2の時期もあり
駿河町奉行				組頭2 広間役7～8 定役・並役・使役・牢守・水主300	定員2の時期もあり
佐渡奉行					
大坂諸奉行					
大坂金奉行	4		15	各手代2	定員4の時期もあり
大坂具足奉行	2		各10		定員4の時期もあり
大坂蔵奉行	2			手代12、他に蔵番・小揚頭・小揚者（104～120）	定員3の時期もあり
大坂鉄砲奉行	2		各20		
大坂破損奉行	3		各20		
大坂弓奉行	2		各10		
大坂船手奉行	1	6		水主同心50 後与力10	定員2の時期もあり
定番	2	40	160		
玉造口	1	20	80		
京橋口	1	20	80		
大番（二組）		80	160		
組頭	8	各10	各20		

（註）『大阪市史』第一、および『国史大辞典』『江戸時代奉行職事典』ほかによる。
なお奉行名は近世前期に限定し、幕末期は省略した。

大坂町奉行は支配所（大坂市中）と支配国（摂・河・泉・播）の司法・行政とともに治安・警察を司る長官であり、その組織・機構の統括者でもある。^②その実務は与力・同心を中核に執行されていた。特に与力を中心であった。与力・同心の編成は、元和五年（一六一九）の大坂直轄によって東西二人の奉行が任命されたことに始まる。このとき、それぞれ与力三〇騎・同心五〇人が配下として編成配属された。

明な部分が残されている。^④大坂地付の与力も、地付・土着化の経過とその根拠はかならずしも明らかではない。本稿では、これらの疑問とその解明の手がかりに、大坂町奉行の地域支配をささえる与力の役割とその成立経過を明らかにして、近世遠国奉行としての大坂町奉行の支配・統括にかんする実務体制の特質を考察する。以下、これを検証するために、三点に絞って分析を行った。

与力騎数には検討の余地があるが、いわゆる大坂地付の町与力・同心の始まりである。^③特に大坂町奉行所の与力の土着化は、町方の行政および治安・警察機構の一環として実務体制の安定的な維持とのための熟練した実務担当者の確保が必要であり、その重要な基盤としての地付侍化であったといえよう。久須美がみた町与力の風体は土着化がもたらした、侍の本分から逸脱しているようにみえた「大坂地付」武士の実態でもあった。それはまた、与力たちがいくら勤務実績を積み重ねても、その地位から脱出できなかった身分的制約の影響でもあろう。

大坂町奉行所とその奉行・与力については、初代東町奉行をめぐる疑問、また初代西町奉行の頓死に伴う与力の離散とその復旧に至る経過など、これまでの研究にもかかわらず不

その一つは、地付・土着化した与力（また同心）が成立した経緯の解明である。与力のいづれもが、元を糺せば徳川氏の家臣団の一員であり、初代の東町久貝正俊、西町嶋田直時に付属させられ、「不時御用」に備える軍役の一環として江戸から派遣された。これを基点として、与力の土着化が始まるが、その要因と経過を確かめることである。二つは、大坂町奉行と与力・同心が奉行の交替毎に取り交わしていた誓詞の存在である。これは創設当初も、またその後も奉行と与力・同心が家臣関係になかったことを示しており、職務の継続が契約関係に近いものでしか維持できなかったことを示している。土着化する背景・条件でもあり、地付となった証拠でもあった。

八田五郎左衛門定保の『公務日記』⁶には、明和五年（一七六八）七月に東町奉行室賀山城守正之が着任した際に誓詞を取り交わした事例が記されている。これを確かめることで、地付・土着化した与力・同心が奉行との契約関係を取り結びながら、職務を継続していた大坂町奉行所の実務体制の特色を抽出しておきたい。

三つは、奉行所実務体制の中核である与力三〇騎態勢の検証である。さきに触れたように、与力三〇騎は既定の事柄に属しているが、当初から固定されていたわけではない。特に西町初代が頓死した後、両奉行所の与力騎数は西町の与力が離散したために、寛永十一年（一六三四）の西町復旧後、慶安元年（一六四八）に至るまで不定であった⁷。この経過を検証する。

これは与力（また同心）実務体制の確立を検証することでもある。与力は、短期間で交替を繰り返す大坂町奉行の下で訴訟・裁判、治安

・警察の実務を担当した。支配所・支配国内の実務に関しては、大坂町奉行が不在であっても常に安定的に存続できる体制の基幹であった。与力三〇騎態勢の確定はその重要な基点である。

このほか、与力が実務を執行する本役と加役の役席体制の検証がある⁸。また与力・同心の治安・警察の実務を遂行するために、与力が徴用していた手下・下聞態勢の整備を検証する必要があるが、本稿の課題は地付与力（同心）の世襲的相続の側面を検証することに限定しておきたい。

一、与力・同心の出自と土着化

（一）与力の由緒と出自

享和二年（一八〇二）十二月、大坂東町奉行所与力八田五郎左衛門定保は由緒書を差し出した¹⁰。そこには元祖鈴木茂左衛門から定保までの系譜と履歴が書き上げられている。その元祖と先祖の履歴に与力の出自に関する記録がみられる。

一元祖

鈴木 茂左衛門

権現様御代年月不知於参州御土蔵番被召抱相勤、年月日不知病死仕、委細之訳、先年類焼之節、書物焼失仕相知不申候、

一先祖

八田五郎左衛門

台徳院様御代慶長十四酉年月日不知茂左衛門老衰迄御奉公乞仕候跡、久貝忠三郎組御徒被仰付相勤、大坂両度之御陣御供仕、水野勘八郎組之節、本姓二付八田与苗字相改、元和五末年御上洛之御供仕、久貝忠左衛門大坂町奉行始而被仰付候節、

与力被仰付相勤、松平隼人正組之節、承応元辰年八月病氣二付番代奉願、同九月朔日病死仕候、

八田氏は代々「五郎左衛門」を名乗り、東町筆頭与力を勤める名門である。その出自は大坂ではなく三河国で、徳川家康の代には土蔵番であった。元祖茂左衛門は秀忠の代の慶長一四年（一六〇九）まで勤め、その跡を継いだ先祖五郎左衛門が御徒（歩兵、足軽）として久貝忠三郎組に配属され、大坂冬・夏の陣にも久貝忠三郎を組頭とするその徒組の一員として出動した。

この後、組頭の交替とともに水野勘八郎組となり、姓も八田に改めるが、これは徳川直臣団の一員として旗本を組頭とする常備軍に組み込まれていたことを示している。その関係は組頭と組織成員であり、直接の家臣関係にはなかった。この関係は、元和五年（一六一九）に大坂町奉行久貝忠左衛門組の与力に付属させられた際にも変化はなく、大坂町奉行とは直接の家臣関係になかった。

久貝・嶋田が大坂町奉行に任命されたとき、久貝は目付、嶋田は鉄砲頭であったが、久貝の由緒書には、「このとき与力・同心を預けらる」と記される。また嶋田の由緒書には、元和二年（一六一六）に「父重次ニあつたまふ御鉄砲足軽五十人をあつけらる」とあり、この鉄砲足軽が与力となっている。

いずれにしろ、八田氏の出自は三河出身の徒であった。大坂移住の時点は大坂町奉行の設置に伴う与力としての配属の結果である。この系譜は『金言抄』に収録された宝暦一二年（一七六二）閏四月に作成した由緒書抜き書きの冒頭にも見られる。そこには、さきの由緒書と

同じく八田氏が徳川家康の代に家臣となり、「土蔵番」次いで久貝正俊組の御徒組に属し、大坂の陣に従い、その後に与力として付属させられたことが記されている。⁽¹³⁾

御徒や鉄砲足軽からの出自と系譜からみれば、与力が配属と同時に地方知行を与えられ、それも「不時御用」、つまり軍事的出動への備えとして与えられたことは重要である。知行は元和五年八月二十六日に、大坂町奉行とともに与えられた。記録は「両御組与力古格追々相省候次第手覚書」（以下「手覚書」）および「五気談」にも収録されている。⁽¹⁴⁾

一両御組与力始而被

仰付候節、不時御用ニ付西国筋江被遣候儀、可有之候間、左様之節人夫召連候ため、旁於河州知行所被下候之段

台徳院様 上意之趣、越前守殿・因幡守殿被仰渡、

知行は二百石で、足軽身分からすれば破格の昇進であった。「手覚書」によれば、与力の知行は軍事出動に知行所の百姓を軍夫として徴発・動員する必要があったため、二代将軍秀忠の「上意」で大坂周辺に配置されたと記している。二百石は騎馬による出動が義務づけられた知行高であるが、これも与力の配属が基本的には軍事的備えのためであったことを裏付けている。この地方知行の意味は、八田定保の由緒書のほか与力由比可兵衛の由緒書でも確かめられ、与力として付属させられた者たちは軍事的な急務のためという受け止め方であり、土着化することは意識していなかったとみてよい。

寛政七年（一七九五）に書き留められた「武備心得方覚書」にも、その冒頭に地方知行が西国筋不時御用への人夫召し連れのためである

ことが記されている。¹⁵これは元禄四年（二六九一）に地方知行が蔵米取に切り替えられた後（後述）、ほぼ毎年二百石に応じた軍役を負担するには「元知」（地方知行）への復旧が必要であると願ひ出た記録である。文中には寛文一〇年（これは寛永一〇年の誤りカ）と元文中（二七三六―四一）の軍役規定を前提にして、その頃は万一の時には二〇〇石に応じた「武備手当」の心得があつたことを強調し、それが近年心許ない状態になっていると述べている。

前々者両御組与力いづれも相応ニ譜代之若党杯召仕、小者等も年古く召仕候者有之由申伝候得共、中興以来下々之風俗悪敷相成、多分出代り渡り奉公人ニ相成、且定式之被下候人足賃を以相雇ひ候者迎も畢竟日雇持之町家之者共ニ有之候間、万一之武備役等ニ者無心元者共と被存候、然ル時者武備之御用被仰付候砌、其身一騎者身命を捨相勤候心得ニ而も、召連候人夫難揃候而者、他見等公儀御恥辱ニ相成候道理ニ至り可申哉と恐入候儀ニ奉存候、

これは地方知行への復歸を願うために、蔵米への切り替えによる弊害として、以前は譜代の若党や小者を召し抱えていたが、すべて渡り奉公人や日雇いになり、非常時に命を捨てる覚悟の者はいなくなっていることを上げている。そのため十分な軍役を勤めるには、地方知行と知行所からの百姓人夫の徴発が必要であることを訴えている。ここには、本来与力の配属が軍事的備えであり、与力自身もそのことを強く意識していたことを示しているといえよう。¹⁶

これに対し同心は最初から大坂に由縁をもった武士であつた。必ずしも土着した、地付の侍ばかりではなかつたと考えられるが、軍役と

は無関係に、大坂町人が請人となつて大坂町奉行所が雇ひ入れる方式で揃えられた（後述）。与力が最初はほぼすべてが江戸からの赴任あるいは軍事的出動であつたことは大きな違いである。

（二）与力土着化の背景

大坂町奉行の与力は最初から大坂土着の武士ではなかつた。当初は軍事的備えのための配属とみられている。地方知行の給与はそれを示している。それが地付・土着化した理由は、安定した実務体制の確保、職務に熟練した要員としての確保のためであつたといえよう。

そこで、土着化の要因を検証してみると、その一つは、大坂町奉行・与力ともに軍役としての大坂赴任であつたことにある。与力は新任の奉行に付属させられ大坂に派遣されたが、それは「不時御用」への備えであつた。出自は足輕でありながら、それが地方知行を与えられた根拠でもあつた。軍事的な発動に即応するために、知行は大坂近所に配置された（表2）。

八田の由緒書抜き書きには、大坂町奉行に従つた軍役であつたことと、屋敷拝領の経緯が明解に記されている。¹⁷

一右知行所之儀者御陣以後之事故地面損所多有之、居屋敷拝領家作等仕候付自分普請難成、因幡守様江御組中ヨリ御願申上年々御普請被成下、当分ハ先ツ四ツ物成之積ニ而請取来候処地面直り少之余計有之ニ付、御組与力共為軍用御用意被成候旨ニ而与力彦人江具足一領・馬具一通・金子貳拾両宛被下置候事、

此具足并馬具とも今ニ所持仕候、

表2 大坂東町与力知行所の配置概況

村 名	知行高	村 高	
交野郡	石		
楠葉村	1810, 167		
新家村	151, 100		
養父村	281, 837		
船橋村	667, 327		
招提村	610, 978	1187, 156	入組（四束久兵衛代官所・嶋田清左衛門知行所、寛永九年迄）
字山村	156, 638	156, 638	全村
片鉾村	208, 358	208, 358	全村
田ノ口村	564, 845	564, 845	全村
甲斐田村	566, 607	566, 607	全村
坂村	525, 355		
中宮村	845, 000	856, 200	入組（木村惣右衛門代官所・）
渚村	1065, 300		
禁野村	185, 361	545, 361	入組（舟越三郎四郎）
郡津村	233, 000		
村野村	752, 763	1004, 670	入組
山野上村	455, 000	531, 725	入組（永井信濃守・片桐石見守・越知弥三右衛門）
梨子作村	516, 000	626, 000	入組（永井庄右衛門）
寝屋村	515, 027	515, 027	全村
燈油村	317, 690	317, 690	全村
尊延寺村	183, 510		
深谷村	305, 000		
藤坂村	222, 023		
津田村	884, 680	1018, 880	入組（畠山長門守）
野村	185, 570		
田宮村	150, 000	194, 360	入組（片桐石見守）
春日村	630, 980		
杉村	45, 554	45, 554	
森村	326, 000		
寺村	352, 000	432, 300	入組（越知弥三右衛門）
私市村	150, 000		
倉治村	1047, 510	1047, 510	全村
私部村	501, 000		
小計	15412, 180		
讃良郡			
太秦村	224, 000		
秦村	199, 100		
国松村	57, 517		
小計	480, 618		
他	107, 000		
計	16000, 000		

註）『金言抄』（大阪市史編纂所蔵）および『河内国正保郷帳写』（枚方市史資料）による。

はなかった。これも大坂地付与力誕生の要因の一つでもあった。

重要なことは、与力・同心の主人は直接ではないにしろ知行を与えている将軍であったことである。奉行は軍務出動時の隊長（頭）であって、主人（主君）ではない。与力は大坂町奉行としての赴任に、将軍からの命令で付属させられたのである。これはまた、大坂町奉行として赴任した旗本にとっても従う徒・足輕は将軍からの「預り」で、家臣関係がないことを承知したうえでの赴任であった。

それを考慮すると、要因の二つは、その出身身分が旗本常備軍に編成される歩兵・足輕であったこと、しかも一人前の侍として家臣を抱える身分ではなかったことである。このことは、八田が書き留めた『公務日記』に大坂町奉行を「頭」と記していることで確かめ

られる¹⁸⁾。たとえば明和五年（一七六八）八月三日の条には、

ここには緊急出動への備えと、そのための「軍用御用意」としての具足・馬具・金子等の支給が書き留められている。軍役は主従関係に對

とある。これは東町奉行室賀山城守正之が、西町奉行所に評議のため

所と具足等の支給は与力たちにそれを意識させ、自覚させた具体的な事態である。ただし、与力の出自に見られるように、御徒・鉄砲足輕

に「五ツ半」（現在では九時）ごろに出向いたときの記録である。「御頭」とは与力・同心からみた大坂町奉行である。

はその頭とは直接の家臣関係がなく、大坂町奉行と与力も家臣関係で

「頭」の呼称は、將軍直属の常備軍大番組・小姓組・新番組などの

長官を「大番組頭」などと称することと同様である。頭は交替するが、大番組の組織は継続される。これは家臣関係がないことから生じている。同様に、大坂町奉行と与力・同心も家臣関係はない。それゆえに、職務は大坂市中と畿内・西国の治安維持・訴訟裁判を管轄する組織・機構であつたから、奉行個人は交替しても与力・同心は役宅である大坂町奉行所（屋敷、場所）に配置・常駐して待機し、新任の奉行を迎えるという職務継続の方式が生じた。

ここに、与力（また同心）は「大坂町奉行」個人に付属するのではなく、將軍の地域（三郷と畿内・西国）支配の拠点である大坂町奉行所に付属し配属されたとみなければならない根拠がある。大坂町奉行の組与力とは言えても、大坂町奉行与力とはいえないのである。たとえば久貝正俊与力ではなく久貝正俊組与力と表現される。その意味で、与力・同心は大坂町奉行所与力・同心と称する方がより正確である。⁽¹⁹⁾

要因の三は、元禄四年（一六九二）正月二六日の地方知行から蔵米取への切り替えである。このとき大坂町奉行の役料も切米に切り替えられた。⁽²⁰⁾この切り替えは土着化の観点からみれば、決定的な転機であつた。地方知行が軍事的対応のために設定されていたから、切り替えは軍役的な意味合いの消失を示している。前出の寛政七年の「武備心得方覚書」はこれに伴う軍事的備えの弛緩を嘆き、その回復に地方知行の復旧を訴えていた。⁽²¹⁾

さきの八田の由緒書にあるように、知行所給与の「四つ物成」が、現米八〇石に対応する。「手覚書」にはこの経緯が記される。⁽²²⁾

元禄四未年正月、両御組与力、唯今迄地方ニ而取来候処、今度御

蔵米ニ御引替被下候間、知行所之書付、御勘定所迄御差出被成候様、御下知書を以被仰渡、右ニ付、当未年ハ四ツ物成之積、頭之裏判手形を以御渡可有之段、御蔵奉行衆江御老中方御証文を以被仰渡候段、記録ニ相見、当時二月・五月・十月三ヶ度之割合、四ツ物成、現米都合八拾石宛頂戴仕候。

ここには切り替えの手続きとして、それまでの知行所の書付を勘定所まで差し出した後、「四ツ物成」での現米支給が老中から御蔵奉行衆あてに言い渡されると記され、支給は二月・五月・三月の年三回であることが明記される。⁽²³⁾

八田定保の由緒書にも元禄四年からの切米への切り替えが記される。

一 地方ニ而被下置候与力知行之儀向後四ツ物成之積ニ而御切米ニ

御引替被下置候旨、元禄四辛未年正月老中方ニ被 仰渡候旨、

小田切土佐守殿被申渡候事、

この切り替えはまた役職の性格の重大な変化であつた。これ以降、軍役からの業務よりも行政実務官的な執務が強調されるようになった。

『徳川実紀』には元禄四年の記事に、「正月廿六日、大坂の町奉行へ役料千五百俵たまはる。与力等采邑を改て廩米を給ふへき旨令せらる」とある。このとき与力だけではなく、大坂町奉行の役料も一五〇〇俵（四斗俵であれば約六〇〇石に相当）に改められた。ただし本来の知行は地方知行のままであつた。

地方知行の廃止は、延宝五年（一六七七）から七年に施行された延宝検地結果の適用と対応している。在方では延宝検地による年貢賦課と徴収が元禄二年から始まり、四年は延宝七年に相当する。大坂町奉

行の役料と与力給与の切米への切り替えは、畿内代官の肅清をはじめとする元禄期の勘定奉行所機構の改変と、それに関係する遠国奉行と畿内西国支配の支配・統制機構の改変の現れと影響であるといえよう。⁽²⁵⁾

二、与力・同心の家職化と世襲的相統

（一）与力「職」の世襲的相統

地付・土着化が与力・同心業務の安定的維持の基盤であったとすれば、その形は職務の世襲化であった。もちろん、与力の職務はもともととは世襲ではなく、奉行は交代するが、与力は居残って職務を継続するという家臣関係のないことから生じた事態である。正確に言えば、世襲的な職務相統方式があったというべきであるが、世襲的相統は与力（および同心）の地付・土着化があつてはじめて出来上がった独特の業務形態である。

したがって与力職務の世襲的職務への変化要因は土着化のそれらとほぼ重なる。その一つは、大坂町奉行と与力・同心に家臣関係がなかったことである。大坂町奉行所与力・同心ではあつても、大坂町奉行与力・同心とは呼べない関係であつた。二つは、地方知行の廃止である。これらによって、与力の職務は軍役的な側面から日常的な治安・警察業務、また行政的業務へ専門職化し、家職化した。

これらが与力の地付・土着化の要因であるとともに、ここに与力の世襲的系譜の根柢があるが、家職化と世襲的相統を促進した相乗的な要因であつた。奉行と家臣関係のないことが、奉行の交代ごとに誓詞を取り交わす「契約」関係を近い勤務状態を産み出したのである。

慶安元年（一六四八）久貝正俊の死去後、東町奉行に松平隼人正重次が赴任した。⁽²⁶⁾この後、大坂町奉行は東西ともに江戸から赴任し、不定期の任期を全うして帰府する勤務形態が定着する。奉行は交代を繰り返し、不時の軍務としての特色を残しながら幕末に至る。

与力としての赴任は大坂町奉行との家臣関係からではなく、将軍への軍役であつたから、その関係は番組の頭（指揮官）と兵士の関係であつた。⁽²⁷⁾初代東町奉行久貝の交代を契機に、奉行も「不時御用」への備えよりも行政官として不定期間赴任する形態となつたことと相俟って、与力は大坂在住のまま役務を引き継ぐ「世襲」の態様になり、与力職として家職化したのである。

これらに加え、与力・同心が大坂に屋敷を与えられたことも、家職化と世襲的相統に拍車をかけた。「屋敷拝領」の経緯をみると、江戸の与力・同心が内藤新宿・青山宿で屋敷を与えられ、それを知った大坂の与力・同心が同様の要望を出し、天満川崎村（大阪市北区）の地域に、与力に四八〇坪、同心に二〇〇坪宛が与えられた。⁽²⁸⁾これは今に続く与力町・同心町の始まりでもある。

その広さも元禄以後は『大坂町奉行管内要覧』『手鑑・手鑑拾遺』『大坂町奉行所旧記』などによると、「東西組与力六拾人、屋敷惣坪数三万坪、但扈人二付五百坪宛」⁽²⁹⁾とあり、一人五百坪の屋敷が東西三〇騎（三〇家）に地割され、配給された。

同様に、同心の役宅も東西一〇〇人に二万坪、一人当たり二〇〇坪が与えられていた。『浪花袖鑑』や『御役録』には、与力・同心一人の
一人の名前と屋敷位置が記されている。⁽³⁰⁾

与力屋敷の給付は、与力の知行二〇〇石が「不時」の御用に必要な人足の確保のために地方知行で給与されたことと関係している。二〇〇石の知行には、人足のほかに幕府の軍役基準から、自分以外に常に五人の家来を抱えることが規定されていたから、屋敷の広さは家来を維持するためにも必要な措置であつたといえよう。⁽³¹⁾

与力・同心の役宅も元和五年の大坂町奉行所創設と同時に設定されたと見てよい。最初は天満川崎村内で望み次第に与えると言ひ渡されたが、「当分圀」いであつて安定的な給与ではなかつた。不都合なことが多かつたので、与力が江戸の与力・同心の事例に従つて新たに要望して、獲得した屋敷であつた。これは生活拠点の安定的な確保につながり、「家」の継続と職務の世襲化の根拠となつたのである。

(二) 同心の出自と職務の世襲的相続

与力に対し同心は、その当初から地付・土着の出自をもつていたが、職務は世襲ではなかつた。同心は東西それぞれ五〇人、合計一〇〇人が配置された。与力は騎数、同心は人数で表示されているように、与力とはその当初から異なつた位置づけであつた。給与は一〇両三人扶持で、最初から扶持米取である。しかも与力が江戸から奉行の配下として、軍役と同じように「出陣」としての位置づけであつたが、同心は大坂町中からの雇い入れであり、「抱入」であつた。

基本的には一代限りの雇用契約であつたから、本来職務の世襲的相続はなかつた。しかし、同心も与力と同じく世襲的相続が当然のようになつていった。次にこの背景を検証しておきたい。

『金言抄』には、同心は当初町人による紹介と請人による「御雇」という、大坂市中の町人とかかわりのあつた武士が大坂町奉行創設時に新たに雇い入れられたことから始まつたことを記す。この初代が支障なく雇用期間を勤め切れれば、その子供が新規に抱え入れられ職務を相続し、与力の世襲的相続と同じ抱入の方式となつた。その勤務は最初から契約関係であつたといえよう。

その後与力と同様に見習での出仕の形式が取られ、それを踏まえて新規抱入（実質は世襲的相続）の慣例が出来上がつていた。『金言抄』にはその経緯が記されている。⁽³²⁾

以下、関連の箇所を抽出しておく。

①但、御組同心之儀者町人請状を以御抱入之ものニ而御座候処、相止ミ候年月等支配之手元古来之書留無御座候付不相分候得共、先年天満友古町町人油屋利兵衛与申者両御組同心之請人ニ相立居候趣ハ兼而及承候もの茂有之、

②乍併無別状相勤御暇相願候もの者直ニ其倅御抱入被仰付候二付、元和年中以来苗字連綿相続仕候者多分有之、右御暇并被仰渡御模様等古来之通相替候儀無御座候、

③尤倅見習之儀者前々ハ御雇与唱、御無人之時ニ二男三男迄も被召出御雇給被下、其後見習与申唱ニ御改、只今之通御扶持給銀被下、二男三男被召出候儀も次第中絶ニ罷成、近年見習勤之外ニ古格ニ準し御雇勤之者出来仕候様罷成、

④且前々ハ御用見習与申儀無御座候処、近年同心共追々相願上、与力同様ニ御用見習之者被仰付候様相成、

⑤勿論与力とハ勤方万事之高下御座候儀ニハ候得共、与力の古格相省候ニ見競候得者、同心之格者御会釈万事古来与者追々模様宜敷罷成候事、

今のところ町人が紹介した武士の系譜は不明であり、同心の由緒書もその点を記している事例は見られない。請状を取らなくなった時期は不明であるとしているが、不要となったときに、与力と同じ家職化・世襲的相続へ転換したといえよう。①はそのことを記しているが、その意味では、同心は当初から地付・土着あるいは大坂に関係した武士で編成されていた。

支障なく勤務を終えた者はその子供が新たに抱え入れられた。②に見られるように、元和五年（一六一九）以来、同様の仕方と連続して同心の家系もあつた。この方式による暇願や新規の抱入も、服部元春が『金言抄』を筆写した寛政一〇年（一七九八）時点まで変わりにくく維持され、幕末慶応三年（一八六七）七月の大坂町奉行所改組³³まで継続していたとみてよいであろう。

③では子供が見習である時期は「御雇」であり、人手の足りないときは二男・三男も雇い入れられたことも記されている。④では、「御用見習」の慣例はなかったが、同心の願によって与力の見習と同じ方式が採用されたことも指摘されている。

同心は町人の請人による「抱入」、子供への受け継ぎと世襲化で専門職化と家職化、与力に類似した雇用関係を作り上げた。⑤では、勤務状態は同心が与力の勤務を見本にすることで、古来に比べ勤務状態の改善があつたと記している。しかし一〇両三人扶持という給与は創

設当初から変わることはなかったが、同心の給与支給のあり方そのものが町方の奉公人雇用関係に近い状態であつたことを表示している。

奉行屋敷での同心の勤務内容は与力のそれに準じていたから、役職名や勤務分担・勤務順序もほぼ同じであつた。³⁴ また勤務状況の向上が同心自身の努力によつていふこと、それによつて同心の格が古来に比べて良くなつてきていることも記されている。

みてきたように、同心は最初から大坂町中に関係した出自と土着性を持つが、与力は当初は御徒・鉄砲足軽など江戸からの赴任であつた。その与力の土着化を進めた要因には、役宅の給与、業務の専門職化のほか知行取から蔵米取への切り替えなどがあつた。特に重要なことは、旗本である奉行の家臣団ではなく、奉行役屋敷（役宅）常駐の実務・警備集団として配置されていたことである。

それゆえに、奉行は不定期な勤務期間が終われば、役職を離れ自らの家臣を引き連れて江戸に帰るが、与力・同心は留守となつた役宅の保全と関連地域の警護のために待機する。これが繰り返されることによつて、与力・同心の世襲的な職務の引継が出来上がつていく。³⁵

この変化は「五気談」に、武術は支配国への出役御用、非常の討ち物・捕り物などのために備えることであり、それに加えて裁判・吟味の際の判断に必要な知識の習得、また寺社家・医者・学者に侮られないための学識・道理を得ておくことが重要であるとして、習得が強調されるようになったことを記している。³⁶

三、与力・同心体制の成立

(一) 与力三〇騎態勢の確立

大坂町奉行所の実務体制にとって与力・同心の存在は不可欠である。特に与力の地付・土着化はその役割の重要さを増幅した。そのうえで、実務体制を考える際に、もう一つ検証しておかねばならない事柄が与力の騎数である。これはすでに『大阪市史』ほかで三〇騎が定数であることが指摘されているが、創立当初には二五騎であつたとする先行研究もある。⁽³⁷⁾ 必ずしも確定していない。これを再度検証しておこう。

大坂両町奉行の与力がそれぞれ三〇騎となつた時期は、記録では慶安元年（一六四八）以降である。それまでは、創設当初の三〇騎をはじめ二五騎・三五騎などの記録が見られ、一定していない。⁽³⁸⁾ これは西町奉行嶋田直時の頓死で西町の与力が離散したためで、騎数は記録では慶安元年に至るまで不定であつたとみてよい。

そこで、まず与力騎数が三〇騎になつた経過をみよう。これについては、『金言抄』に収録されている「河内国之内壹万六千石之郷帳」⁽³⁹⁾（以下「郷帳」）に注目しておきたい。これは元和五年（一六一九）八月二六日付けの役高と知行の記録である。奥書に二五騎とある。

高都合壹万六千石

右之内

三千石

嶋田清左衛門

五千石

同人同心給

此五千石を貳拾五騎二割

貳百石ニ相当り候、

三千石

久貝忠三郎

五千石

同人同心給

前二同断

以上 右之分当末年分可有御渡候、以上、

元和五年

八月廿六日

伊丹 喜之助印

松平 右衛門佐印

佐野 主馬印

小堀遠江守殿

五味金右衛門殿

これによると、元和五年の時点で与力は東西それぞれ二五騎であつた。知行は大坂町奉行とともに、河内国交野郡三ヶ村で一万五四二一石八升、讃良郡に三ヶ村で四八〇石六斗一升八合が配置されている（表2）。これが久貝・嶋田の知行分と「同心給」つまり与力給に分けて記され、地方知行であつた。

ところが「手賞書」には、最初三〇騎、次に願ひ出て三五騎になり、西町奉行嶋田直時の死去によつて西御組与力は退散、曾我丹波守が西町に就任したとき西御組が二五騎となり、さらに久貝が死去後に西組へ五騎を回して東西三〇騎宛になつたと記している。⁽⁴⁰⁾

一両御組与力最初ハ三拾騎宛ニ而、其後依御願拾騎相増三拾五騎宛之處、越前守殿御死去後西御組与力退散仕、其後丹波守殿被仰付候節西御組与力貳拾五騎御抱入ニ相成、猶亦因幡守殿御死去後東御組与力五騎西御組江被加三拾騎宛ニ被仰付候間、

この経緯は、騎数は別にして妥当である。これによると、西町与力

の場合は、通説からみれば当初三〇騎、三五騎、寛永五年（一六二八）に西町奉行嶋田越前守直時の死去（頓死）で一時浪人・退散、寛永一一年曾我丹波守古祐の西町奉行就任で二五騎で復活、慶安元年に東町の久貝因幡守正俊の死去で東から五騎を移し、三〇騎となったということになる。同様に、東町与力の場合は三〇騎から三五騎、寛永五年から慶安元年の久貝死去まで三五騎、死去とともに五騎を西町に回し三〇騎となり、以後これで固定されたことになる⁽⁴⁾。

元和五年八月二六日付けの記録では、奉行の知行高がそれぞれ三千石、その「同心給」として五千石が書き上げられ、「此五千石を弐拾五騎ニ割弐百石ニ相当り候」と但し書きされており、与力の知行二〇〇石で二五騎分しか確かめられない。

騎数については久貝正俊の家譜にも注意しておきたい。元和九年の増騎である。この年は秀忠の上洛があり、増騎はその関係とみられるが、『寛政重修諸家譜』には、「河内国交野郡のうちにして三千石を知行す。このとき与力・同心を預けらる。九年、また与力十騎をあつけらる⁽⁴⁾」とある。さきの郷帳にみられる最初二五騎を前提にすると、元和九年に三五騎となったことになる。「手覚書」にも「願」により東西ともに三五騎になったと記すが、久貝の家譜と照合すると、これは元和九年のことで、増騎は東町だけとなる。

与力は通説では当初三〇騎であるが、確かなことは大坂町奉行創設当初は二五騎であり、東西奉行所ともに与力騎数が記録上で三〇騎となった時点は慶安元年であった。それが東西でそれぞれ異なった経緯をたどって固定されたのである。

問題は創設当初の騎数二五騎と、寛永一二年の両組与力総数が六五騎であったとする記録である。寛永一二年、幕府は諸大名も含めて譜代困窮者に恩代金貸与を触れ出した。『金言抄』によると、このとき東西の与力・同心も一〇年の返済期限で与力五〇両、同心五両の貸与を受けた⁽⁴⁾。西町奉行が曾我丹波守古祐の任命で復活した翌年である。

一寛永十二乙亥年大小名衆者勿論、御切米拝領之輩迄困窮之者二相応ニ御金可被借下旨被仰出、両組共与力者五拾両、同心者五両宛拾年ニ可致返納由ニ而御金請取候、御証文申請候、因幡守殿与力芦谷源兵衛、曾我丹波守殿与力仁木八郎左衛門罷下り、御証文申請罷登御金拝借仕候事、

記録には、東町与力の名前とその拝借金が、「金子合千六百五拾五両 与力三拾六人分」と記されている。表3はその一覧である。このとき東町与力は三五騎であったが、証文の写しには三四人の名前が記されている。西町与力は省略されているが、東町与力三四人のうち一名（大橋右衛門佐）は本来の与力ではないと、記録を書き留めた八田が考証している。この一人は「表立不申与力ニ被召加候儀ニも候哉、同人相除候得ハ都合六拾五騎ニ相成申候事⁽⁴⁾」と断定している。

これによると、寛永一二年時点で東西の騎数総数は「都合六拾五騎」から、この時点で東町与力は三五騎、金子貸与を受けた実数は三三騎であり、欠員が二騎あったことになる。この東町与力数三五騎は、さきの久貝の家譜に、元和九年の一〇騎増騎が記されていることから妥当性がある。八田の考証から東組与力が総数三五騎（欠員二騎）とすれば、貸与総額は一六五〇両で五両少ないが、記載の「千六百五

表3 恩貸金拝借与力一覧

与 力 名	系 譜
細桑加芦八安牧勝加太牧寺工山不田小渡木中猪市金前中小片大西西高渡	点掛分家筋なし 東組桑原権九郎元祖
谷原七郎源之丞	東組八田五郎左衛門元祖
善右衛門兵衛門丞	東組牧野元左衛門元祖 西組勝部弥十郎元祖
兵衛門兵衛門丞	東組大西駒蔵元祖 東組牧野平左衛門元祖 東組寺西一郎左衛門元祖 東組工藤七郎右衛門元祖
兵衛門兵衛門丞	東組金井塚左源太元祖 東組由比可兵衛元祖
兵衛門兵衛門丞	西組小川甚五右衛門元祖 東組片山数右衛門元祖
兵衛門兵衛門丞	東組西田八郎右衛門元祖

註)『金言抄』(大阪市史編纂所蔵)による。

拾五両」にほぼ相当する。これからすると、寛永一二年の時点では西が三〇騎、東が三五騎でなければならぬが、西町与力が寛永一一年に二五騎で復活すると、総計でも六〇騎にしかない。

また西町与力は、慶安元年に久貝の死去で東町与力から五騎を移し三〇騎となったとされるが、これから逆算しても総計は六〇騎で、寛永一二年に「都合六拾五騎」との不整合が出てくる。また東町与力の場合は、通説の当初三〇騎から考えると、元和九年の増騎で四〇騎になっていたことになるが、これであれば、寛永一二年の総数六五騎(東四〇騎、西二五騎)には符合する。しかし八田の考証では、寛永一二年の東町与力の騎数は三五騎であつたから、これも妥当性は薄い。

少なくともこれらの経過から考えると、西町与力が「三五騎」となったことはなく三〇騎が最大騎数のようである。そこで、これを整理・解釈すると、当初は両町とも二五騎、元和九年に東町が一〇騎増しで三五騎、そのまま寛永五年の嶋田頼死まで推移、その後東町与力は元西町与力を抱え入れ実数四〇騎になっていたこと、寛永一一年七月に西町与力が二五騎で復活、その直後から寛永一二年の恩代金貸与までに五騎が東から西に移されて三〇騎と三五騎となり、記録にみられる総計六五騎となっていたと見た方が整合性がある。

この推測は西組与力が浪人したとき、「手覚書」に「西御組之儀者越前守殿御死去之砌、一旦因幡守殿御咎人之御勤ニ罷成候節一同浪人仕候得共、其頃東御組之明キ江被召出、其俣連綿相統仕候者も有之」とあるように、東組与力欠員の補充と救済の意味合いから、余剰騎数として召し出された者もいたとみられる。これは元禄以前には、欠員補充のために適宜新規に雇い入れられた者もいたから妥当性があろう。

大坂町奉行の与力三〇騎(東西六〇騎)は定員数であり、欠員や実数はこれに常に一致しているとは限らない。東町の与力は寛永一二年の時点でも二名の欠員が確かめられ、実数が三〇騎を越える場合もあった。明和五年(一七六八)の『公務日記』では東組三七の役付の与力が数えられる。⁽⁴⁶⁾ 寛永一二年の場合でも、与力騎数が実数で二五騎と四〇騎であっても、三〇騎と三五騎であっても不自然なことではない。これを前提とすれば、寛永一二年の「都合六拾五騎」の意味は、西町の与力が前年の一一年に二五騎で復活したとき、東町の与力は実数四〇騎であつたとして考えられないこと、そうでなければ、西町与力

が二五騎で復活した翌年であることとの整合性がない。そのうえに立って、寛永一二年の六五騎を考えると、寛永五年から一〇年までの東町与力の騎数は四〇騎になり、一年の西町奉行所復活の与力騎数は二五騎であったが、その直後にはすでに東町与力から五騎が西町へ移されていくことになる。つまり寛永一二年の金子貸与の時には、西町与力三〇騎と東町与力三五騎であったとみられる。

慶安元年、東町奉行久貝正俊が死亡した。これまでの検証によれば、この時まで東町与力の騎数は欠員があらながらも三五騎を維持していたが、慶安元年の久貝の死亡を契機に欠員を切り捨てる形で、両組与力三〇騎態勢に移行したと考えられる。これ以後、東西の定数が三〇騎として固定され、一般的にそのように表記され普及しはじめたといえよう。それまでは与力の騎数は創設当初の大坂町奉行所の制度・機構的不確定さもあって、とりあえずは二五騎を基準に最大四〇騎を上限にして、騎数定数は東西とも不定であったとみたほうがよい。

（二）「御役所御作法」と与力・同心の誓詞

大坂町奉行所の制度的確立と、与力・同心職の世襲的相統、家職化は新たな「御役所御作法」を生み出した。それは、与力・同心が新任の奉行に誓詞と御役誓詞・加役誓詞を提出する儀式であった。誓詞は「起請文」であり、いわば与力・同心の就任式である。この儀式には由緒書も添えられ、奉行との家臣関係がなかったために、与力・同心職の継続に必要な作法であった。⁽⁴⁷⁾

「御役所御作法」の確立時期は不明であるが、与力・同心の地付・

土着化と家職化した実務態勢を前提とし、それを維持するための儀式でもあった。「手覚書」には、この手続きが記される。⁽⁴⁸⁾

一御頭様方御新役被蒙 仰候御者、其御組与力仲間為惣代申合を以て人出府仕、此諸入用ハ欠所銀御払二相成、且仲間申合御祝儀上ヶ物仕、隨身之御用相伺、夫々御自分御用向をも相蒙帰坂仕、猶上坂之砌江州大津迄是また仲間為惣代御出迎仕、当表御船上之節茂両御組与力・同心其外役掛り御出迎之もの披露等仕、其後御役所御作法向万事右惣代之もの江御相談等も有之、

新任奉行と対面に向けた与力仲間惣代の出府、着任の祝儀、大津までの出迎えとともに、「御役所御作法」に従って、与力・同心は由緒書・親類書・勤書・「誓詞」および御役・加役誓詞を差し出した。これによって新たな雇い入れ（抱入）と勤務の関係が結ばれ、職務が継続される。

誓詞の提出は与力・同心が地付・土着化した証でもあり、世襲的相統の重要な儀礼でもあるが、新任奉行にとっても与力・同心に滞りなく実務を遂行させるためには、避けられない役所作法、着任の儀礼でもあった。これを明和五年（一七六八）七月に着任した東町奉行室賀山城守正之の事例で確かめてみよう。⁽⁴⁹⁾ 室賀正之はすでにこの年三月には任命されていたが、着任は七月四日であった。八田定保の記事では、七月二日に大津着、三日に京都、四日に昼船にて大坂到着、大坂町奉行所到着は四日の八ツ過ぎ（午後二時過ぎ）である。

奉行は奉行所到着後、大書院の間で組与力全員と対面している。その面前で、前任の鶴殿長達が室賀正之に組中引き渡しの手交をして、

その終了後に与力全員が退出した。これが与力と新任奉行の初対面の儀式であった。対面の儀式後に、奉行の家老・用人から仲間惣代桑原信右衛門が「御組鍵印三八枚」を請け取り、信右衛門以外の与力に一枚づつ渡された。このとき組の「御纏」は公事場に置かれており、用人・取次らから御組・同心まで見るようにと伝えられている。これは東町が出勤時の目印の纏であると考えられる。

この後、与力それぞれが奉行役宅へ到着の「お悦び」を伝え、奉行家中年老・用人・取次・書翰へも同様の挨拶をしている。対面の翌日五日には、正六ツ時に「御頭」の組への「御目見」があり、与力らは袴羽織で奉行所に出ている。このとき組中から奉行へ献上物・祝儀が贈呈されている。⁽⁵⁰⁾

惣誓詞は、奉行から恒例の祝儀と返礼を受けた後、新たな御頭との間に配下として、役職とその忠実な遂行のために提出される。これは与力・同心それぞれが押印のうえ、新御頭に差し出している。奉行と与力・同心の職務契約である。

この経過を享和三年（一八〇三）五月の近藤氏（三右衛門・左衛門）事例に、由緒書ほかを参考にしながら確かめておこう。⁽⁵¹⁾

『公務日記』には、明和五年（一七六八）七月二〇日、室賀の家老野村弾右衛門から当番与力（八田郡太夫）に対し、組中与力の親類書・御役筋勤書、絵図・書物を取り集めて差し出すようにとの申し渡しがあったことが記される。これを受けて、二三日には川役桑原信右衛門が組中親類書の認方の形式を確認している。⁽⁵²⁾『公務日記』の二四日の記事では、この認方は以前の通りで、御頭による案紙の一覧も済ん

でいたことが知られたとある。

享和三年の近藤氏の記録をみると、同年二月二五日付けで由緒書下の廻状が出され、認替えのうえ月番与力へ三月八日までに差し出すことが指示されている。与力の由緒書は江戸で添削を受け、江戸からの達書とともに担当与力に伝えられ、組中に触れ出された。組中では添削を踏まえて加筆・清書のうえ、奉行の家老他宛てに提出している。⁽⁵³⁾

『公務日記』の触によると、親類名前書は曾祖父母より認め、認方は与力支配役の両人が一覽したうえで信右衛門に掛け合い、若干の文言が変更され作成された。⁽⁵⁴⁾

安永八年（一七七九）八月に、東町奉行土屋駿河守直に差し出された「東組与力役人之分勤人数并役替順覚書」には、「御番入」から後の役職経歴が書き上げられ、安永八年時点での役職が記されている。これは同年正月に新任の奉行で赴任した土屋守直の家老に渡された「御役筋勤書」であり、役職に就いていた与力の経歴書である。表紙には「土屋駿河守殿家老日置甚太夫江相渡候扣」とある。また八田家文書には、八田氏の由緒書のほか与力近藤氏の由緒書も残されている。近藤氏の由緒書は享和三年五月改めの控えであるが、誓約書と同時に親類書・役筋勤書とともに作成されたとみられ、雛形が付けられている。⁽⁵⁵⁾

明和五年の室賀正之の事例では、これらを終えた後奉行が一覧したうえで、着任から四週間後の七月二八日には、与力全員の誓詞、惣誓詞が提出された。この後、役職に就いている与力は御役・加役誓詞を差し出し、「居判」（据判）したうえで家老井出為右衛門へ渡された。

その礼式をみると、惣誓詞の場合は、奉行所書院に与力が支配両人

や無役・役人（役付与力）を問わず勤順に四通りに並び、頭（奉仕）が上之間に出席、書翰役が「起請文」（誓詞）を読み上げ、「血判」を押していく。その順番は上席から済まし銘々退座する。このとき頭はすでに退座しており、血判終了後に家老が奥へ持参して終わる。

また「御役之誓詞」は、頭が書院次之間の上之間に出席し、役付の与力を家老が役名で呼び出し、起請文を読み上げたうえで血判をして支配兩人役より役頭へ渡し、それを書翰役が受けて取って家老へ渡し、家老から役頭へ差し出すという手続きをとる。加役の与力はその後に呼び出され、加役誓詞を読み上げて血判という段取りである。

惣誓詞・加役誓詞の後、改めて与力一同が書院へ並び、御礼を申し上げた後で頭が挨拶して退座という運びとなる。さらに、与力の誓詞提出の後で同心誓詞が提出された。同心も御役誓詞・加役誓詞の差し出しがあったが、同心の役人は上役が血判を見届けるだけで終わる。

誓詞の取り交わしは、新任奉行の赴任ごとに繰り返された契約であり、与力・同心と大坂町奉行の間の儀礼であった。これがまた職務に向かう、赴任者と迎える者との意識を増幅させたのである。誓詞は、家臣関係にない奉行と与力・同心がそれぞれの職務を遂行するために取り交わした契約であった。「御役所御作法」としての時期的確定は困難であるが、与力・同心にとっては家職化した職と身分的安定・確保のために、また世襲的相続のために必要な儀式であったといえよう。

おわりに

大坂町奉行所与力は騎馬同心とも称され、知行高二〇〇石の侍であ

る。その出自は歩兵・足軽であり、与力としての配属は本来の身分からすれば破格の昇進であった。それに比べ同心は当初から雇用身分であり、与力とは異なった位置づけにあった。そうでありながら、与力・同心は大坂町奉行所の訴訟・裁判、治安・警察の実務体制を支えていた。大坂町奉行が業務を遂行するための実務担当者であった。

本稿はその与力・同心体制の確立期に焦点を絞って、基礎的な事実関係の検証を行った。特に与力に焦点を当てて、地付・土着化、家職化と世襲的相続、与力騎数の変遷と固定を検証することで、与力・同心体制の成立を概観した。

地方知行の給与は軍事的備えの顕著な現れであったが、これは元和九年の増騎が同年の秀忠上洛と関連していたこと、それに伴う警備・武備増強の一環とみられることで、さらに配置の意味が、当初は軍事的側面にあったことがみえてこよう。同様に寛永一年の西町奉行の復旧は、同年の家光上洛と徳川政権の外国船対策の改訂に関係しているといえよう。再建は家光が大坂を見分した後ではあるが、それもまた国内外の治安・警察態勢の整備が必要との認識から出ているとみてよいであろう。翌寛永一二年の恩代金貸与はその証の一つである。

蔵米取への切り替えは、徳川政権の勘定所機構の改変、地方政策の変更にいかかわって代官の粛清があり、延宝検地結果の年貢・諸役賦課・徴収への適用が始まったことと関連していた。代官所機構の改変と関連した遠国奉行機構の改変であり、異なった視点からさらなる検証が必要なことを示唆している。

また与力・同心体制の成立は、ここで検証した地付・土着化、家職

化と世襲的相続、与力騎数の変遷と固定を踏まえて、その職務の実際を検証することが不可欠であろう。その実務体制は、本役と加役という役職態勢、および治安・警察の実働態勢としての「手下」「下聞」態勢で遂行されていたが、次にはこの実態の検証が求められる。これらのについては稿を改めて検討したい。

〔注〕

- (1) 久須美祐雋「浪花の風」(『日本随筆大成』第三期、第五巻)。
- (2) 『国史大辞典』(吉川弘文館) および渡邊忠司『大坂町奉行と支配所・支配国』(東方出版、二〇〇五) 参照。
- (3) 『大阪市史』第一(大阪市、明治四三年)。
- (4) 渡邊忠司「大坂町奉行をめぐる二、三の問題」(『大坂東町奉行所与力公務日記』大阪市史料第二十三輯、『同』(統)・第二十六輯の解題)、白川部達夫「大坂町奉行成立についての二、三の問題」(『日本歴史』第四八一号、一九八九)。
- (5) これは奇妙なことであるが、大坂町奉行、与力・同心に関する諸研究をみても、当然のように与力・同心は大坂地付あるいは土着の武士と記されている。『大阪市史』第一、春原源太郎「大坂町奉行所の訴訟と裁判」、『新修大阪市史』第三巻など、いずれもそうである。筆者も『町人の都大坂物語』ほかで同様に記していた。
- (6) 大阪市史編纂所蔵。『大坂東町奉行所与力公務日記』(大阪市史料第二十三輯、『同』(統)同第二十六輯)に収録されている。
- (7) 『大阪市史』第二で指摘されて以来、『新修大阪市史』第三巻まで、この経緯は現在でも明らかではない。史料の不足・未発見によるところが大きいと考えられる。中部よしこ「近世初期の幕府の大坂役職新考」(『大阪の歴史』一六号、大阪市史編纂所、一九八五)では、二五騎から三五騎、三〇騎という経緯を提起されているが、筆者は東町与力は四〇騎まで増加したことがあるとみている。
- (8) 曾根ひろみ「与力・同心論」(神戸大学教養部紀要『論集』四〇号)。現在のところ、与力・同心の役職についての詳細な研究はこれ以外は見あたらない。加役の増加は与力・同心らの実務が増加していること

を示すが、それが人員の増加ではなく、与力・同心の兼帯で処理されている。ここに騎数・人員の定数制とそれに伴う実務のあり方の特色が出ていてと考えている。別稿で検討する。

- (9) これは与力・同心が町方の取締および刑事事件に備えるため役木戸と長吏・小頭を手下として配置していた。これも与力が実務を遂行するために必要な態勢であった。この点の検証も別稿に譲る。
- (10) 八田氏由緒書(神戸市立博物館蔵八田家文書、大阪市史料第三十三輯『大坂町奉行吟味伺書』に収録、大阪市史編纂所、平成三年一月)。
- (11) 『寛政重修諸家譜』第一〇三六。
- (12) 『寛政重修諸家譜』卷第二九〇。
- (13) 『宝暦十二壬午年閏四月私由緒書之趣忠左衛門様へ御頼ニ付書拔仕江戸表江差出扣』と題され、『金言抄』(大阪市史編纂所蔵)に収載されている。『金言抄』は八田五郎左衛門定保が書き留めた記録を与力の服部元春が文化四年(二八〇七)に書き写した記録である。
- (14) 『金言抄』に収録。
- (15) 『金言抄』に収録。これには、徳川政権の軍役規定に対応した軍備について、詳細に確認し、それが必要であるかどうかを尋ねている。
- (16) 宝暦一二年(一七六二)閏四月の八田の由緒書(『金言抄』)には、このことがあえて但書で記されている。
但、大坂町奉行与力者不時御用ニ付、西国筋江被差遣相働候儀も可有之候故、左様之節者知行所人夫召連候ため大坂近所ニ而知行所被下置候段秀忠公様 上意之旨因幡守様并御同役嶋田越前守殿被仰渡候事、
- (17) 前出。宝暦一二年閏四月の由緒書抜き書き。
- (18) 八田定保『公務日記』下(大阪市史編纂所蔵)。翻刻は大阪市史料第二十六輯『大坂東町奉行所与力公務日記』(大阪市史編纂所、一九八九)に収録。
- (19) 筆者はかつて八田定保『公務日記』を翻刻し、大阪市史料第二十三・二十六輯の編纂にかかわった。その際に表題をあえて「大坂東町奉行所与力公務日記」と表現したが、これはそのためである。
- (20) 『金言抄』、および『徳川実紀』元禄四年正月二六日条参照。
- (21) (22) (23) 『金言抄』。
- (24) 前出『徳川実紀』。
- (25) 朝尾直弘「近世封建社会の基礎構造」(御茶の水書房、一九六二)。

- (26) 『大猷院殿御実紀』第六十九(『徳川実紀』)、『寛政重修諸家譜』。
- (27) 系譜には家康の直臣として仕えた経歴を持つ与力もいた。八田定保の由緒書はこれを強調する。前出『大坂町奉行吟味伺書』に収録。一部を掲げる。
- 両御組与力之内二者
 神君様参州御在城之節、御奉公相勤、慶長・元和年中御陣之節并五年台徳院様 御上洛之節も供奉仕、京都二条於御城大坂町御奉行嶋田越前守殿・久貝因幡守殿始而被 仰付候節御組与力二被召加当表江引越候、以来連綿実子又者養子ニ而相統仕来候者も有之、又者町御奉行組与力始而被 仰付候砌被召出候、以来実子又者養子ニ而連綿相統仕候者茂有之、
- (28) 「手覚書」(『金言抄』)。
- (29) 大阪市史料第六輯『手鑑・手鑑拾遺』、同第『大坂町奉行所旧記』
- (30) 「浪花袖鑑」は大阪市史料第五十三輯所収。
- (31) 註(16)の「武備心得覚書」。
- (32) 前出「手覚書」(『金言抄』)。
- (33) このとき両町奉行所が統合され、与力・同心も一組になった。『大坂町奉行所与力留書・覚書拾遺』(大阪市史料第四十七輯、一九九六)。
- (34) 『公務日記』(前出『大坂町奉行所与力公務日記』)
- (35) この状況は大坂町奉行所与力・同心だけではなく、定番・加番および大坂六役と大坂船手奉行の与力・同心も同様であった。大坂船手の場合は、寛文五年(一六六五)正月に、幕府老中指示で二員制へ改変、小浜氏の世襲が解消された。それとともに「与力十騎」が二分されて「上乘五人」となったが、このことから与力・同心が小浜氏・大坂船手とは直臣関係ではなかったことが知れる。小浜氏は同年七月に江戸に帰り、摂津国西成郡内に置かれていた知行所も移されるが、同時に配属された与力・同心は上乘と水主に名称変更された。
- (36) 「五気談」(『金言抄』) 参照。
- (37) 前出中部よしこ「近世初期の幕府の役職新考」。
- (38) 『大阪市史』第一、二八五頁。
- (39) 『金言抄』。『正保郷帳写』(枚方市史料第八集)の記録とほぼ一致。
- (40) 『金言抄』。寛永一年の西町与力騎数は『徳川実紀』第二篇には二〇騎とある。閏七月朔日の条に、「大坂町奉行曾我又左衛門古祐千石加られ三千石になされ。与力廿騎。同心五十人属せらる」とある。六五一頁。
- (41) 前掲『大阪市史』第一。
- (42) 『寛政重修諸家譜』。秀忠は元和九年五月一二日に江戸を立ち六月八日に京都に到着している。『徳川実紀』第二篇、二五三―二五五頁。
- (43) 『寛永年中久貝因幡守殿与力連名帳』。なおこの貸与は、寛永一二年七月七日に、譜代の者への恩貸金五〇万八七〇〇両に含まれる。『徳川実紀』第二篇、六八五頁。
- (44) 前同。
- (45) 『金言抄』。
- (46) 前掲『大坂町奉行所与力公務日記』。
- (47) 八田五郎左衛門定保の記録『公務日記』(前出『大坂町奉行所与力公務日記』)、明和五年七月朔日以降の記事を参照。
- (48) 『金言抄』。八田家文書などに残る与力の由緒書、同心の履歴書、また親類書などはその証左である。前出『公務日記』にもみられる。
- (49) 明和五年の記事は前出『公務日記』による。
- (50) 同『公務日記』。献上物は樽・肴で、役宅に持参、西組からも樽・肴が届けられている。新任の祝儀としては基本的な様式であった。ちなみに肴は目の下一尺八寸(約五四^{センチ})の鯛であった。
- (51) 大阪市史料第四十七輯『大坂町奉行所与力留書・覚書拾遺』に収録。
- (52) 記事には、桑原が認め方の形式について、新御頭の好みを内々に伺い置きたいとの申し出があったと記す。これは奉行と与力・同心がお互いの思惑を探り合うような微妙な関係を象徴しているようである。交替ごとに、双方にある種の緊張感が常に漂っていたことを示している。
- (53) 前出『大坂町奉行所与力留書・覚書拾遺』参照。
- (54) 雛形とそれに従った由緒書は神戸市立博物館所蔵の八田家文書に残される。八田家文書は他に九州大学法学部図書館・大阪商業大学谷岡記念館などに分散所蔵されている。
- (55) 前出『大坂町奉行所与力留書・覚書拾遺』参照。

〔付記〕

史料の閲覧については、大阪市史編纂所と神戸市立博物館の御高配を得た。深謝申し上げたい。

(わたなべ ただし 人文学科)
 二〇〇五年十月十九日受理